

注意の理法 : 論説

著者	杉山, 富槌
雑誌名	龍南會雜誌
巻	2 2
ページ	1 7 - 2 4
発行年	1893-12-26
URL	http://hdl.handle.net/2298/4158

す、これごとくに何くれと陳述せる所以ありけり、

注意の理法

杉山富雄

吾人の境遇は常に全一あるものに非ず、而て吾人の事物亦た單一ある能はず。されば吾人は吾人の四圍にある事物及び現象に對するや、必ず親切ある注意をなし、周到なる配慮をなすを要す。若し吾人或る事物に對して之に心意を注射することなくんば、其事物に對して得らるべき智識は、毫も之を收むる能はざるべし。其形跡大小状態等より、其動靜及び性質に至るまで、吾人は之を注意よりて認識するを得るあり。即ち心意の發動は皆な注意に其端を發し、心意の官能は悉く注意に其源を取るものにして、吾人の智識と稱呼する所のものは、必ず先づ注意の關門を經過せざる可らず。人もし漫然鴨立澤に歩を移さは、果して何等の感慨かあるべき。人もし茫然都市に佇立せば、果して如何なる觀察をかなし得らるべき。實に注意の作用は、心意の作用中最も緊要なる關係、價值ある位地を有するものありとす。此故に教育に關係あるものは、其教育者たると被教育者たるとを問はず、十分に注意の理法を考究せざる可らざるの必要起る。余試みに其概略を記述せん。

注意とは何ぞや、心意の如何なる状態を云ふか。曰く注意とは或る物質若くば事物に對して、心意を活潑に傾注する作用なり。今一物を瞻視して以て之を知覺することを爲さざれば、心意は散漫せる状態にあるべし、稱して之を不注意と云ふ。注意とは正に此不注意の状態に反對せるものを云ふなり。尙ほ他言を以て之を云へば、注意の作用とは内外兩界の事物及び現象に就き、特に或る目的を撰みて他の目的を退け、心意を一方に傾注すると即ち是なり。

仮りに注意なまどせんか、果斷ある行爲明晰なる思想及び活潑なる情念は決して發生し又た成立せざるに至らん。即ち心こゝに在ざれば視れども見えず、聽けども聞えず、動けども其の目的を知らず、その行爲その思想一として和合一致することゝあかるべし。之に反して吾人の目前に現出せる事物の異同及び種別を判知するを得るは、必ずや吾人が之を注意する場合に限る。且つ吾人の受けたる感觸の一層強烈あるは、注意の作用によりて之を思想する時に在りとす。例へば吾人或る事物に對して注意を繼續する時は、自ら他の事物を聯想し、之に依りて益々吾人の感觸を強烈ならむを得るが如し。尙ほ一步を進めて之を云はんか、所謂思想する事は即ち注意の作用を隨意的に或る特別なる事物に傾注して心意を活動せしむることに外ならず。されば注意作用は常に他の能力と附隨して働き、獨立の作用を爲す能はずと雖も、智識的發動とは最も密接なる關係を有し、智識的發達の一大動力たるあり。

又注意は其注意せる事物及び現象に、勢力活潑並びに明瞭を與ふるものなり。例へば鼓鐘の音響を耳にするに當て、吾人之心意を傾注すれば、其音響の感觸は愈よ強く且つ愈よ深かるべし。思想記憶の如きも注意の作用によりて、其の明瞭の度を増加するを得。斯の如く總ての心意の印象は、注意の作用によりて深厚にせられ激烈にせられ分明にせられ又制限せらるゝものあれば、注意は感情の上に着しき効果を及ぼし、些細なる苦痛も此格別なる部分に聚合するときは、爲めに身体の錯亂を來し、終に現實ある苦痛とあるに至る。之と同じく甚だしき病患も、他に心意を傾注して此に注意を向くる徴せば、左まで苦痛を感ぜざるなり。彼の軍卒が戰場に負傷するも、或は其の當時に於て毫も苦痛を感ずることなしと云ふは、即ち注意を他よ奪はれて之に頓着する暇なければあり。之に加ふるに

吾人の行爲が勇氣を増し活潑を益し又一層精細を加ふるに至るは、吾人が吾人の注意を目的とする事物に聚合するときに在りとす。注意の效果亦た偉大ありと謂ふべし。

吾人は注意するに必ず二個の方向に於てす。其の一は即ち外界の事物にして、例へば眼目に映するものゝ如き或は耳朶に響くものゝ如き、所謂感覺の世界を爲せるもの、其の二は即ち内界の印象にして、例へば觀念思想感情等の如きものなり。注意の作用は必ずや此等の兩界の内何れかに向けらるゝものなれば、智識の探究事物の觀察或は理性の考究を爲さんとするに際しては、必ず先づ注意の勢力を強烈にするを要するや無論のことなり。既に注意の方向に二種あるか故に、從て注意を刺戟する原因に二種あるを知る。甲は外界戦因に於て、事物其物ゝ或は其の附隨物に、注意を惹起すべき形跡の存在せるもの、例へば赫々たる光輝を有する燈火の如き、或は奇異なる音響を發するものゝ如きを云ひ、乙は内界戦因にして、或る格別なる方向に注意を向けしむる意志、例へば學者が眞理を討究して之を完ふせんとする熱心、或は兒童が師父の愛寵を得んとする願望の如きものを云ふ。

注意の區域即ち限界に至ては、固より一定の制限あるを。或は一事物を注意するを得べく、或は同時に數多の部分に注意するを得べし。是れ恰も野外の光景を眺望して、隨意に其眼界を大にし或は小にするを得るが如し。然れども後者の場合の如く同時に數多の部分に注意を向けざる可らざる時は、部分相聯絡して成せる一個の組織に心意を傾注するものあり。斯の如く注意の區域に廣狹あるが故に、從て吾人の眼界に映じ或は他の感覺によりて知覺する事物多ければ、自ら明瞭を減じ、又事物少なければ自ら明瞭を増すは當然の結果あり。吾人若し書籍を繙き或は説話を聽くに當りて、一時に聯絡なきことを注意せざる可らずとせば、吾人は甚だ困難を感せざる可らざるに非ずや。『一時に一

物』とは心意の活潑を保持する唯一の法則ありと謂ふべし。彼の學生よして業に荒み事に恣ある者の状態を観察せば、此の法則の適切あるを知らん。而して又吾人は數多の連續せる感觸か或は事物に接するに當りて、之を一括するを得るあり。之を例へば或る人の顔面を見て、其各部の釣合にて其形状を認知するを得、又は音楽を聞て、其抑揚調子等よて其音響を覺るを得るが如き。彼の觀察に巧妙ありと云ふも畢竟觀察者が、其眼界に映する事物を洞察して其關係を看破し、之を一括し得たることに外ならず。

注意に二種あり、一は不隨意的にして他は隨意的あり。若し心意が單に外界の事物の與ふる戟因よりて刺戟せらるゝ時は、注意せんと欲して發する注意に非ざるが故に、之を無意注意と云ふ。又之を反射注意ともいふ、是れ外部より誘はれて發する注意なればあり。之に反して吾人が心意の刺戟を受けて起す注意は、意志の作用に因りて爲すものなれば、之を有意注意と稱す。例へば或る事物に就て考究せんとする好奇心か、若くば欲望心よよりて發する注意は、吾人の願望の刺戟に原因するが故に隨意的あり。斯の如く注意の作用に二種ありと雖も、何れも心意の作用にして、其發達の順序を云へば、無意注意先づ發せ而して後有意注意起るものなり。吾人は次々戟因に就き其概略を記述すべし。

注意の中にて最も簡單なるものは、電光或は轟聲の如き強大なる刺戟を受けたる時に起る瞬時の注意なりとす。而して斯の如き注意は對比若くば變化なければ發生するに至らざるものなれば、從て一度起れる注意も永く繼續するに於ては、心意に何等の効果を及ばざるに至る。人あり水車の近傍に到れば暫時は其音響に注意を奪はれて之を忘却する能はざるべし。然れども水車は斷えず同じ音響

を操返へて發するが故に、終には其人に何等の感觸を與へざるに至るべし。生理的に之を云へば、水車の發する音響が神經中樞を疲勞せしめて、感覺を鈍くするに原くものありと雖も、心理的に之を云へば、感觸永續すれば終には注意の作用に勢力を及ぼし能はざるに因るものあり。叱咤の聲は兒童を畏縮せしむるに足る、然れども常に叱咤すれば終には毫も効果なきに至る、是れ亦た以上の理由より原因するものあり。阿蘇の坂梨の坂路を登り、漠々たる浪野原を進み、波瀾の如く起伏せる丘陵に唯だ茅艸の風に翻るを見るのみにて、吾人をして倦厭に堪へざらしめし光景より、溪谷深くして草木茂り、紅葉丘嶺を粧へる大分山路に入れる時は、吾人は思はず知らず快哉を叫破せざるを得ざりき。是れ境遇の變化と光景の對比とより因りて、吾人の注意發動せるものにして、彼の一發の砲聲が田舎の沈靜を驚破せる時に、吾人が心意を傾注すると全様あり、之を要するに吾人を去て注意を牽起するに至らしむる戦因は種々ありと雖も、之を概括せば次の如く解説するを得べし。

(一) 目的物の美麗ある外見を有するか、或は之を注意去て愉快を感じ得べき場合。

(二) 快樂か或は苦痛ありし經驗を想起せる場合。

(三) 所謂好奇心によりて或る物を知らんとする欲望の存する場合。

而して其事情に従て注意に強弱あるは勿論あり。今注意を牽起する戦因の勢力が、如何なる場合に強くして如何なる場合に弱きかを究むべし。蓋し此の勢力の強弱を知るは、注意の力を養成するに最も必要なる條件なりとす。

(一) 戦因の量及び度の多寡に従て、注意を牽起する勢力に強弱を生ず。

(二) 戦因の性質が生ずる結果の快あるか不快あるか、或は兩者の間に在るかによりて、其勢力に強弱

あり。而して通例快あるものと不快あるものとは勢力強く、兩者の間にあるものは勢力弱きを常とす。

(三)以上の事情によりて注意を牽起するに至らざるものも、若し吾人が戦因に或る特別ある關係の存するあらば、其の興味の爲めに其の勢力強さを加ふる。

(四)戦因の變化は意識の發生に必要なが故に、變化の多寡は注意を牽起する勢力の強弱に關係す。(五)戦因の方向が急激ある變化をなす時は、注意を牽起する勢力は甚だ弱し。是れ心意の作用は常に或る方向に傾ける後は、其習慣を繼續せんとする傾向あるが故あり。

今二三の例を引きて以て以上の説明を補はんと欲す。茲に幼兒あり暗室にありて彩美ある光明を認めたる時は、欣喜叫呼して措かざるべし。是れ目的物の美麗に於て眼目を喜ばし愉快を感せしむるに因るものあり。又幼兒に食物を供給する舉動を目撃せしむれば、彼は歡然として之に注意を向くるべし。是れ過去に於ける經驗を想起して、其の結果の快樂あるを知得すればあり。耶馬溪は天下の名勝あり、行て之を探らんと欲す、此時に當ては吾人其行路の難易遠近の如きは、毫も顧慮する所なく、唯だ速かに此に到らんことを希ふ。是れ好奇心の爲めに強く注意を此の一方に傾注し、他を顧みるに暇なきが故あり。而して耶馬溪に至るの後は其風景の秀逸あるを嘆賞して時の遷るを知らず。是れ其の風景に紅綠高低草木岩石流水等の相錯雜するあり、文以て表はす可らず、筆以て描く能はざる雅致優美清純風趣の存するありて、到底他に求めて其比を見る能はざる風光あるに因るものあり、彼の俗に無聊ありと云ひ、或は無味ありと稱する境遇は、即ち注意を牽起するに足る事物の存在せざる處を指してしか云ふあり。

無意注意は其作用を繼續せんとする時は、意志の觀念の指導を受くるが故に、有意注意に轉移せざるを得ず。然れども無意注意が意志の作用を受くる時は、其注意が傾向を増加えて繼續するに止まりて、他の影響を與ふる能はざるあり。即ち意志は吾人の注意をして或る部分に向はしむることを得るも、雖も、これによりて其の部分に吾人の注意を結定せしむる能力を有せず。必ずや他に意志を獎勵して留心せまむるものを要す。是れ即ち前條に陳述せる興味存せざる可らざる所以あり。之を要するに意志は吾人の注意の方向を指定する力を有し、且つ吾人の心意をして之を留心せしむる準備を爲さしむ、而して仮令へ此の準備あるも、其目的とせるものに興味ある現象の發現するに非ざれば、意志は留心ある靜定せる心意の状態を生ずること能はずして、注意は終に解散するに至る。知るべし意志は單に心意と事物とを紹介するに止まりて、決して兩者を相密着せしむるものに非ざること。蓋し有意注意は無意注意に属するものにして、兩者の間には次の如き關係ありて存す。

- (一) 内部戦因と外部戦因と其方向を異にする時は、其強さものの注意を牽起す。
- (二) 有意注意が無意注意と其方向を全ふする時は、有意注意の勢力益す強し。
- (三) 有意注意起るも、無意注意の興味を附加するなくんば、心意の聚合を得る能はず。
- (四) 無意注意の勢力強大あるものは有意注意の勢力強大なるものを動かすことを得れども、有意注意の強大なるものは無意注意の強大あるものを動かす能はず。

吾人は日夜事々物々を四圍に控へ、種々雑多の境遇に處するものあれば、常に注意の能力を鋭敏にし活潑にし且つ第一にして、以て觀察を正確にし思想を整理し智識を増益し、又行爲を正大に爲すことを務めざる可らず。蓋し注意の能力を養成する方法の如きは、各自其の理法を了得し深く之に心を用

ゆれば、之を發見すると容易なりと雖も、試みにその最要なるものを列擧すれば略は次の如し。曰く、目的とする事物に心意を傾注して、決して他を顧みる勿れ。曰く、一物を注意せる後、或る他の事物に心意を轉移するに敏捷ならんことを熟せよ。曰く、注意すべき事項數多の部分より成る時は、之を總括して理會することを勉めよ。曰く、事物の興味を知得することを勉め、以て心意の傾注を容易ならしめよ。曰く、注意の能力を過働して疲勞に至らしむることを避けよ。

蓋し注意力は智識蓄積の大本あり、思想を整理する大權者あり。注意力は意識の中に出出する總ての知覺と總ての觀念とを一個の系統に綜合することを得、即ち或る知覺若くば觀念をして、他の類似の知覺若くば論理的關係ある觀念と聯結せしむ。注意力は思想を整理するが故よ、自ら思想をして規律正しく且つ秩序整ふを得せしむ。則ち知るべき、古來非凡の智力ありと稱揚せられたる者は、決して妙術奇法に依りて非凡ありしに非ず、唯だ注意によりて此に到達せるものありと云ふことの、眞に吾人を欺かざるを。ジャン、マリー、ギニヤウ曰く、思想は猶ほ觀念の糸を以て布を織るが如し、思想の織物は屢經緯の糸を斷つ。之を結て工を完くすることを得せしむるものは注意力あり。故に注意力は意志の作用にして、内界の行爲に於ける道德と稱するも不可あるなしと。あゝ注意の理法の如きは吾人之を知らざる可らず、唯だ心理學者の考究を價するのみに非ざるあり。殊に智能養成を事とせる學生と、十分に之を考究するの必要をくればならず。